

メリーさんと一緒！！（メリスレ5th47-69）

作：771 gnkv6j0F.

「私、メリーさん、今、あなたの後ろにいるの」

鳥遊 成海(たかなしなるみ)はそれまで、それなりの人生を送ってきた、と自負していた。

別に幸せ、という訳では無いが、特に不幸だとも思って来なかった。

特段変わったところも無い、平凡な人生だと、彼は思っていた。

だが、その日は明らかに異常だった。いつの間に、自分の後ろにその少女は立ったのだろうか。

数日前から、携帯に繰り返しかけられた少女からの電話。ただのイタズラ、都市伝説を模した幼稚な行為。そう思っていた。

だが現にこうして、流布した噂の通りに、その少女はやって来た。

耳に電話を当てたまま、成海は立っていた。まだ振り返ってはいないが、その気配は確固たるものとして背筋を舐ぶり、背面の皮膚一面を汗で覆わせたが、しかしそこを舐めずっていくものは冷たい。

殺気

漫画等でしか見た事の無い気配が、そこにはあった。

「ああ、これがそうなのか」と納得させるだけの威圧感が、湧き出る水のように怒濤の勢いで迫り、しかし腐汁のようにずるりとした粘りと不快な感触を持って、背中から染み渡って来る。

成海はまず、恐怖で弛緩した体を動かさず事に努めた。

耳に当てたままの携帯を離し、ゆっくりと、ゆっくりと腕を降ろす。

それから、音を立てんばかりに凝り固まった首を後ろに回しながら、極度の緊張からか既に鈍痛さえ覚え始めた膝を動かして、後ろを振り向く。

そして、「見てはいけない」と警鐘を鳴らす己が本能を抑えながら、閉じようとする瞼を必死に見開いて、そこにいる少女を、視界に収めた。

「え……」

そして、思わず声を漏らしてしまった。それと同時に、体を支配していた恐怖が一瞬で拭い取られるのを感じた。

何故なら、振り向いたそこに立っていた彼女が、あまりにも美しかったからだ。いや、可憐と言うべきだろうか？

大きな青い瞳とそう高くない背が創るは幼さ。それに反し、金に輝く長い髪と身を包む黒いドレスが作り出すは妖艶。

そして右手に携えられた、孤月を状の刃を持つ巨大な鎌は、日常から逸脱したものの象徴か。

三つの相反する要素。だが、それを一つにまとめて、なおかつそれらを美しさとして認知させるのは、彼女の表情故であろうか。

彼女は、ほとんどその顔に、感情を乗せてはいなかった。

だが、僅かにそこから滲み出るのは

「やっと、振り向いたの」

少女が、口を開いた。その声は、やはり感情を乗せていなかったが、しかし透き通った、心地のよい声色だった。

「あなたには、何も分からないかも知れないけど、死んでもらうの」

彼女は、右手の大鎌を構えた。

「……おい」

成海は口を開いた。

「お前、マジで俺を殺すの？」

「……、うん」

小さく、彼女は頷いた。

「…だったら、」

成海は、すっ、と彼女の顔に人差し指を向けた。

「何で、そんな悲しそうな顔してんだよ？」

そう言われて、彼女の臉がびくりと動いた。

「………思っていない」

「けっ、嘘つけ」

吐き捨てるようにして成海が言った。

「何か知らねーけどよ、無性にムカついてきやがったぜ」

成海はがりがり頭を掻き毟った。

彼の中に今、渦巻いているのはただ単純な怒り。

「手前、どうしても俺を殺すっての？」

「………」

少女は、黙って頷いた。

「だったらよ………」

成海は再び、少女に向けて人差し指を突出した。

「手前にこんな事させてる奴、ここに連れて来い」

「………え？」

少女は驚いたのか、ぼかんと口を開いた。

「手前は他人をぶっ殺す時に泣いてやがる。それは、本当は殺しなんかやりたくねえ、って証拠。だったら、無理矢理やらされてるに決まってる。だったら俺がそいつを殴って、殺しを止めさせてやるって言ってんの」

少女は暫く啞然とした様子だったが、やがてきつ、と成海を睨み付けた。

「何を言ってるの？ これは、私が自分で勝手にやって来た事。誰かにやらされてなんかない、私がやりたいと思ってやってる事！！」

始めは落ち着いた口調だったが、最後には彼女は激昂していた。

「誰かにやらされてるなら、とっくに自分で止めてるに決まってる………止めたくても止められないの！！」

「だったら！！」

成海も、彼女を押し程の勢いで叫んだ。

「俺が止めさせてやる！！ 俺が止めてやる！！」

「出来る訳ない！！」

「出来る！！ やってやる！！ やってみせる！！」

一瞬の、静寂があった。

「………何で？」

彼女がぼつりと漏らした。

「何で、見ず知らずの私の為にそこまで言ってくれるの？」

彼女のその問いに、成海は意外な反応を見せた。

「はぁ？ 何言ってるの、手前」

彼は首を傾げて見せた。

「別に、手前の為に言ってるじゃねーよ。これは、俺自身の為だ」

成海は、自分の喉元に手を当てた。

「気に入らねー事をそのままにすると、ここになんか詰まるような気がして嫌なんだよ。嫌で嫌でたまらないんだよ。これは俺の為にやってんだ。だから、お前が気に病む必要はねーよ」

喉元を擦りながら、成海は言った。

「で、でも」

彼女は尚も食い下がる。

「私は、人殺し………」

「だったら何だよ」

成海は、それを一言で切り捨てた。

「お前は誰も殺したくないって、思ってる。だったら、それが出来るようになるのが、死んだ奴に對して、やってやれる事なんじゃね？ つーか、やらなきゃならない事じゃね？ 責任持ってちゃんとさ」

その時、彼女は泣いていた。

彼の事を優しい人だ、と思った。

「ねえ」

「ん？」

「これから、一緒にいてくれる？」
「お前がそうして欲しいなら」
「私、人を……」
「そんなの、俺は気にしない」
成海は、にかっと笑って見せた。
「だから、右手の鎌は置いてくれよ、メリーさん」

「……ん、お」
成海は携帯のアラームで目を覚ました。
ベッドの上で大きく伸びをすると、部屋のカーテンを開けた。
「……うん、今日も清々しい朝だ」
実に晴々とした顔でそう言ったが、携帯のアラーム音が「歌舞伎町の女王」で、果たして本当に清々しく目覚められるのだろうか。
暫く外を眺めた後、ベッドを振り返る。
そこでは、金髪の少女が静かに寝息を立てている。
その無邪気な寝顔に、成海の顔が思わず弛む。
成海の元にメリーがやって来てから数日。
元々一人暮らしの成海に、彼女を受け入れない理由は無かった。
「おーい……メリー……朝だよ……」
そろそろと足音を忍ばせながら、成海はメリーの横に歩み寄った。
「朝ですよ……起きてくださーい……」
言葉でこそ彼女を起こしているが、その声量は余りにも小さい。
彼女が静かな呼吸で、ゆっくりと胸を上下させているのを確認すると成海は、そっと、メリーの頬を指で押した。

むにっ。
ふっくらとした、柔らかな頬の感触が、指先から伝わってくる。
ただ、指先から彼女の温もり、という奴は伝わって来ない。
それはやはり、彼女が人間では無く、妖怪や幽霊と言った存在だからだろうか。
でも、
「……へへっ」
込み上げてくる笑みを、彼は抑える事が出来なかった。
「……かーわいいいなあ」
ぼつりと、彼は漏らした。
成海はもう、メリーが可愛くて可愛くて仕方が無かった。
その幼さの残る美貌の前に、彼女が何者か、と言う事はほんの小さな問題でしかなかった。
と、言うか、成海はあまり細かい事は気にしない、出来ない人間だった。
そして、そんな可愛らしい少女が無防備な状態にあれば、多少のちょっかいを出したくなるのが、男の幼心と言う奴では無いだろうか？

「……へへー」
成海は続いて二回、頬を押してみた。
むにむにっ。
「……んんっ」
ぱしっ、と成海の手を払い除けて、それでも目を覚ます事は無く、メリーは寝返りをうった。
「っ……！！」
成海は笑いを堪えるのに必死だった。
自分の太腿をつねって、吹き出しそうになるのを耐えた。
笑いが治まると、彼は更なるイタズラを思い付いた。
そっと、そうっとメリーの耳元に口を寄せると、ふう～、と優しく息を吹き掛けた。
「やっ、んっ……」
ぴくん、とメリーが身を震わせた。

……あれ？
成海は眉を潜めた。もう一度、息を吹き掛けてみる。

「ふあっ……やあ、あ……んっ……」

頬を僅かに紅潮させて、少女は身を振り、喘ぐ。

艶めかしさと言うか、そう、言うなれば「女性」を感じさせるようなものを振り撒きながら、成海は首を傾げた。

これは自分が心のどこかで期待したものとは違う。しかし

「これはこれで……」

良いんじゃないーい？

つい先程まで彼がその内に抱いていたものは幼心。

しかしそれは、今やなんぞ別の黒々とした物へとメタモルフォーゼ、トランスフォーム、六神合体していた。

「も、もう一回だけ……」

初めてエロ本を見た中学生のように胸を高鳴らせながら、成海は三度、メリーの耳に己の口をちかづけた。

その時、

「ん……う……」

手の甲でゴシゴシと目を擦りながら、メリーは身を起こした。

「……おはよう、成海くん」

慌てて飛び退いて、足首を捻った成海に、彼女は会釈をした。

「あのね、成海くん」

サクサク、と朝食の食パンを嚙りながら、メリーが口を開いた。

「ん？ なんだ？」

「あのね、私、変な夢を見たの」

びしっ。

一瞬。一瞬だけ。成実の動きがカチンコチンに固まった。

「へ、へえええ。どど、どんな夢だよ？ おお俺に話してみろよ？」

平然を装って、しかし全然誤魔化せて無い態度で成海は聞き返した。

「えっとね」

そんな成海の様子を気にするでも無く、メリーは答えた。

「ネズミにね、大きく作りすぎちゃった人形の耳を嚙ってっお願いしたらね、私の耳に噛み付いてきたの」

「……え、ドラ もん？」

“ into infernal days ” closed

コメント

- ・ 映画「メリーさんの電話」 三原光尋監督 出演：紗綾、長澤奈央、上杉奈央、安岡あゆみ、土井玲奈、麻倉みな、沙倉しずか 他 -- saaya_holic (2010-05-25 22:01:33)

名前:

コメント:

投稿